発掘 文学の宝

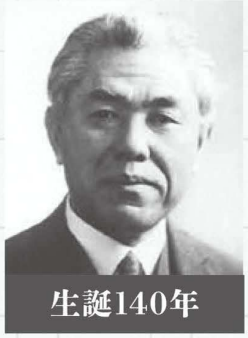
10回目となる「文学の宝コラム」、今月は『五足の靴』メンバー３人目、旅の後に南蛮情緒的、切支丹趣味、耽美享楽的な作品を多数残した木下杢太郎です。天草の南蛮・切支丹文化に大きな影響を受けた杢太郎について２回連載でお届けします。

企画／ドットワークス　下川嘉奈

木下杢太郎（きのした もくたろう）

1885年８月１日-1945年10月15日、本名：太田正雄。静岡県伊東市出身。

皮膚科の医師であり、劇作家、翻訳家、美術史・切支丹史研究家、さらに『百花譜』（植物写生872枚）を描くなど多才。



「五足の靴」リーダー 世界的皮膚科の名医

平井　建治

木下杢太郎（本名・太田正雄）は、静岡県今の伊東市出身。旧制一高、東大医学部卒業。森鴎外の助言で皮膚科を専攻している。詩人・劇作家・キリシタン研究家。パリ留学後、愛知医科大学教授、東北大学医学部教授、東大医学部教授を歴任。皮膚科の講座を担当、ハンセン病の世界的権威と言われた。

筆者が大好きな「五足の靴」のメンバーである。それは、作風が難解でも天草の切支丹史を如実に作品に表現しているし、短髪に切れ目で朴訥（ぼくとつ）とした風貌が心地よい。「五足の靴」旅の計画は北原白秋が立てたが、旅をリードしたのは杢太郎だった。それだけに、出発前は図書館などへ通い、熱心に天草の歴史を勉強している。

平成14年12月、筆者は玉名高校側の古書店・ほると書房から、やっとの思いで「木下杢太郎日記」全5巻を買った。すぐさま、近くのビジネスホテルに飛び込み、「五足の靴」が来島したページを探した。しかし、明治40年の日記が欠落して、残念ながら無かった。実は、「日記」のあとがきに、「明治40年同41年の2年分が欠けているほかにさほど長期にわたる欠落は見あたらない。」とある。よりによって「五足の靴」旅の分のみを紛失していたのである。

また、筆者は小学生の頃、頬が白くなるおばたけ（※）やハゼノキにかぶれて、本渡の行徳皮膚科医院にバスで頻繁に通った。診察室の壁に、一枚の「絵」が飾ってあったのを覚えている。後日談だが、「絵」は、杢太郎が描いた椿の絵であった。熊本医科大学の三宅勇教授は、東大皮膚科の同窓の杢太郎からその絵を貰い、三宅は弟子・行徳素雄の本渡での開業記念にその絵を贈った。杢太郎は、若い時に画家になりたいと思ったりもしていた。その為に、「五足の靴」紀行文でも、天草では、唯一大江八幡宮の参道をスケッチしている。

平成26年２月、前年に亡くなった谷川健一を偲ぶ「熊本地名シンポジウム」が、熊本市で開催された。谷川は熊本県出身で、民俗学者、地名学者、日本地名研究所所長であった。谷川と馴染みがあった民俗学者・柳田国男長男未亡人、杢太郎の親類で、日本地名研究所の鈴木茂子が参加した。確か、鈴木は伊東市の「木下杢太郎記念館」の顧問だと聞いた気がする。

ところで、杢太郎は、「五足の靴」旅の後、詩集「天草組」、戯曲「天草四郎」を発表した。その戯曲「天草四郎」に登場するのは、天草四郎時貞・山田右衛門作・千束善右衛門・天草甚兵衛・森宗意軒（もりそういけん）。

大矢野町の柳漁港近く、小松屋渚館の裏手に森宗意軒神社がある。果たして森宗意軒とは何者か。宗意軒は、徳川幕府を震撼させた島原・天草の乱の首謀者の一人で、天草の怪人と恐れられた実在した人物である。（つづく）

お勧め本

『南蛮寺門前 和泉屋染物店他三篇』

木下杢太郎著／岩波文庫

切支丹物と呼ばれる短編集。戯曲「天草四郎」が収録されています。

※注）皮膚病「はたけ」のことを、天草では「おばたけ」と呼びます。